

《論 説》

「永続革命」の概念について

——良知力氏に答える——

淡 路 憲 治

はじめに

良知氏は『思想』の1982年5月号の論文「革命史における言葉の虚像について」(以下、「虚像について」と省略)において、マルクス主義的な革命史のなかから、「一国革命」と「永続革命」の二つのタームをとり出して、「一 一国革命ということ」、「二 永続革命ということ」の二項目にわけて議論している。周知のごとく、氏は、すでに『向う岸からの世界史』、『マルクスと批判者群像』等の仕事で、これまでのマルクス主義の既存の考え方や概念に根本的な検討を加えて、マルクス主義的革命史を新しい学問的水準に引上げる画期的業績をあげてきた。氏の仕事で特徴的なことは、氏は徹底的な文献・資料蒐集と厳密な考証にもとづいて、既存の考え方や概念を根底から検討している点にある。それに裏付けられて、“良知史観”ともいべき見解を打ち出していくが、そこに氏の仕事の質の真の新しさがあるといえる。

こんどの論文「虚像について」では、その書き出しで、次のように述べている。「マルクス主義的な革命史のなかから二つのタームをとりだしてみる。一つは〈一国革命〉ということ、他は〈永続革命〉ということである。歴史の実態につきあわせてみると、どちらも虚像を映し出している、だが、虚像は実像より強いのだろうか。勝てば官軍、いつしか虚像が実像として歴

史のなかに生きる。」この主張に、氏の考え方と氏の特徴的な叙述のスタイルがよく示されている。

私の、この論文の読後感として残った印象は、次のようなものである。まず、「一国革命ということ」の叙述は、すでに氏が『向う岸からの世界史』で詳細な資料的裏付けをもって主張したことのくり返しであり、この叙述で、特に新しい論点がつけ加えられているわけではなく、したがって、新しい積極的論点は少なく、全体として二番煎じの感が強い。次の「永続革命ということ」の項目では、人の意表をつく新しい発想と見解が打ち出されている点は、大きなメリットであるが、私には、氏の見解には根本的な難点があるように思われる。氏は、「永続革命」というタームについて、それは「錯誤と無知」と「誤解」に基き、「事実と虚構」をとりちがえた「虚像」である、と声高に批難している。その際、氏は私の「永続革命論」を名指しで批判している。そこで本稿では、氏による批判に対する私の考え方を述べたい。それが本稿の中心テーマであるが、なお補論として、マルクスとブランキズムに関する氏の見解についても言及しておきたい。

## 1 「永続革命」について

### ① 良知説の内容

まず「永続革命」は虚像であると主張する良知説の内容を紹介しよう。

氏は、マルクスの『フランスにおける階級闘争』（以下、『階級闘争』と省略する）から、次の著名な定式を引用している。「プロレタリアートはますます革命的社会主義のまわりに、すなわちブルジョア自身、それにブランキの名をふさわしいと思ひ違えた共産主義のまわりに結集しつつある。<sup>(注)</sup>

---

(注) このセンテンスの原文は、*„gruppiert sich das Proletariat immer mehr um den revolutionären Sozialismus, um den Kommunismus, für den die Bourge-*

この社会主義は革命のパーマネンツ宣言であり、階級の違い一般の廃止に、階級の違いを生む基礎であるすべての生産諸関係の廃止に、この生産諸関係に照応するすべての社会的つながりの廃止に、そしてこれらの社会的つながりから生じるすべての観念の変革に到達するための必然的な過渡点としてのプロレタリアートの階級的ディクタトゥアである。」(MEW, Bd. 7, S. 89, 大月書店版全集, 第7巻, 86ページ)

この引用文を受けて氏は、次のように解釈し、かつ主張している。「マルクスはここでフランスを世界史的革命の範例としてとりあげ、そこでの権力奪取の過程をいくつかの過渡的段階にわけてあきらかにしようとする。マルクスの言葉が具体的な歴史との関連では何を意味していたかは、あとで述べることになるが、一応ここでその過程をマルクスにしたがって典型的に整理しておく、フランスにおいてはまず最初に成立するのは〈ブルジョアジーの政治的支配〉、すなわちブルジョアジーのディクタトゥアである。しかし、このブルジョアジーの政治的支配も二つの段階をふむ。まず〈立憲共和制〉である。マルクスはフランスの権力構造を分析して、これは農民を搾取している者たちのディクタトゥアだ、と述べる。次に来るのは、〈社会＝民主主義的共和制、赤色共和制〉(MEW. Bd, 7, S, 84)である。これは農民の同盟者のディクタトゥアである。これもまた、依然としてブルジョアジーの政治

---

oisie selbst den Namen *Blanqui* erfunden hat,<sup>1</sup> となっているが、大月書店版、マルクス＝エンゲルス全集の翻訳では「プロレタリアートは、ますます革命的社会主義のまわりに、すなわち、ブルジョアジー自身がそれにたいしてブランキなる名称を考えだした共産主義の周囲に結集しつつある」(7, 86ページ)となっている。つまり、,für den die Bourgeoisie selbst den Namen *Blanqui* erfunden hat<sup>1</sup> に対して、大月訳では、「ブルジョアジー自身がそれにたいしてブランキなる名称を考えだした」と訳しているのを、良知氏は「ブルジョアジー自身がそれにブランキの名をふさわしいと思ひ違えた」と改訳している。私は、,erfunden hat<sup>1</sup> にあえて「思ひ違えた」と訳するのは行きすぎであり、これは大月訳のごとく「考えだした」で別に不都合はないと思う。それゆえ、以下では「考えだした」の訳を用いる。

的支配の枠内にとどまっただけではあるが、しかしすでに〈プロレタリアートの解放をその目的としている〉権力形態である。いいかえると、それは依然としてブルジョアジーの政治的原理、すなわちブルジョア民主主義のうえに立ってはいるが、ブルジョア的原理をぎりぎりに完成させることによってその原理自身を否認せざるをえなくなるような政治的支配の形態である。したがってそれは、〈プロレタリアートの政治的支配〉(MEW. Bd. 4, S. 317)と紙一重である。」「以上は1850年におけるマルクスのフランスにかんする分析だが、〈パーマネンツ〉という概念は、ドイツに関しても、同年3月の共産主義者同盟中央委員会の呼びかけ(以下、「呼びかけ」と省略。淡路)のなかで用いられている。これまたあまりにもよく知られた文章だが、一応引いておこう ………。〈われわれの利益とわれわれの任務は、多かれ少かれ有産的なすべての階級が政権から追い出され、国家権力がプロレタリアートによって掌握され、一国だけでなく、全世界のすべての主要な諸国においてプロレタリアの連合が前進して、これら諸国のプロレタリア同士の間で競争がやみ、少なくとも決定的な生産諸力がプロレタリアの手に集中されるまで、革命をパーマネンツ化することである。〉(MEW, 7, 247以下)さらにこの呼びかけは、プロレタリアの〈闘いの声はこうでなければならぬ、革命をパーマネンツに〉、というスローガンで結ばれている。」「(「虚像について」105—06ページ)

以上が、良知氏が引用している『階級闘争』と「呼びかけ」の中で主張されている、いわゆる「永続革命」に関する箇所であり、引用文の訳文は良知氏のものである。この引用文中の「革命のパーマネンツ宣言」、「革命をパーマネンツ化する」、「革命をパーマネンツに」の用語について、氏は、「パーマネンツという言葉をそのまま使ってみたが、従来の訳語はもちろん違う」という。すなわち、『階級闘争』の「革命のパーマネンツ宣言」Permanenz-erklärung der Revolutionは「革命の永続宣言」と訳され、「呼びかけ」中の「革命をパーマネンツ化する」die Revolution permanent zu machenは「革命を永続させる」と訳され、「革命をパーマネンツに」Die Revolution

in Permanenz は「永続革命」と訳されている、という。<sup>(注)</sup>

良知氏は、このようにパーマネンツの訳語について述べたあとで、氏は、「1850年にマルクスが使ったこれらの言葉が、その後の永続革命論の基礎になったことはたしかであろう。だが永続革命という言葉はよく考えてみると、どうも意味がはっきりしない。この言葉を使う人自身あまりよくわかっていない。」と言う。ついで氏は、私が『西欧革命とマルクス、エンゲルス』で述べている永続革命の概念規定について、次のように批判する。

「淡路氏自身も、この永続革命論はマルクスとエンゲルスが自分で名づけて定式化したものではないから、その概念規定には一定の不明確さ、曖昧さが伴うことを認めたくえで、永続革命論の内容を次のように要約される。淡路氏によれば、「永続革命論は、1844年の『ヘーゲル法哲学批判序説』から『共産党宣言』を経て、前述の『呼びかけ』にいたるまでマルクスに共通し

---

(注) これらの「革命の永続宣言」、「革命を永続させる」、「永続革命」の訳語はMEWの大月書店版のものであり、一般的に用いられている訳語である。しかし、これと異なる訳をしているのは、水田洋氏である。氏は、講談社文庫版の訳で、「共産党宣言・共産主義の諸原理」の中に「付」として収録している「共産主義者同盟へのよびかけ」の中の die Revolution permanent zu machen を「革命を継続する」(147ページ)と訳し、また Die Revolution in Permanenz を「革命を継続せよ」(156ページ)と訳している。このように、水田訳では、大月書店版とは異なって「革命を永続させる」「永続革命」という訳語ではなく、permanent に「継続」という訳語をあてている。なお水田氏は、氏自身の訳者の「解説」において、「呼びかけ」の主張について、「ドイツのプロレタリアートは、独自の党組織によって、ブルジョア革命からプロレタリア革命への、〈継続革命〉をたたかわねばならない」ことが述べられ、また「呼びかけ」では、プロレタリアートの世界的勝利が目標としてかけられてはいるが、世界同時革命ではなく、むしろ、当面、ドイツの「継続革命」の方が強調されている(209—10ページ)、と主張している。なお、氏の「訳注」において、「革命を継続せよ」という訳語を用いていることに関して、「Revolution in Permanenz 永久革命または永続革命と訳されることがある。このことばには、断絶がないという意味があるだけで、継続か永続かは、解釈の問題にすぎない。」(230ページ)と述べている。この意味において、「永続」をさけて「継続」をとっている水田訳の場合も、後述するような良知氏のいう意味あいにおいて、「永続」または「永続革命」の訳をさけて、「継続」または「継続革命」と訳しているわけではない。

で示されている考えであって、〈ブルジョア革命は、それ自身として完結されるのではなく、革命を永続化させてプロレタリア革命にまで至るという見解〉であり、また〈この革命の永続化の過程は、他面からすれば、そのための経済的条件が未成熟であるにもかかわらず、あえて革命行動をもって強行突破して、経済の発展段階を飛び越して、プロレタリア革命にまでいたるという見解〉であり、したがってまた、〈ブランキ主義的な少数の職業革命家に指導された少数者革命という性格をともなう〉見解なのである。前段に示されている見解は一般的であり、淡路氏の見解はとくに後段に力点がある。と、淡路説を要約する。ついで氏は、以下のように淡路説を批判する。「いずれにしても『永続革命論』という言葉の説明としては不十分に思える。とくに3月前期までふくめたマルクスの考え方を〈ブランキ主義的な少数者革命〉とするような考え方には、基本的な疑問を呈せざるをえない。」と述べた上で、「〈経済の発展段階を飛び越す〉という〈いわゆる飛び越し論〉だとか、ブランキ主義的な〈少数者革命〉とかが、〈永続革命〉の中心的内容であるという議論は、歴史の実態的關係に即してみるかぎりでは、到底成立しえないのではないだろうか。」と。

このように淡路説を批判した上で、「永続革命論の内容がどうのこうのというまえに、このタームそのものが多分に恣意的な造語ではないのか。永続革命論とか permanent revolution (これはマルクスの言葉ではない) というのは、錯誤と無知に基づいて、事実と虚構をとりちがえた議論ではないだろうか。その点の検証のために、実際の48年革命史へもどる必要がある。」という。

そして良知氏は、48年革命史のなかでの「パーマネンツ」の用語の実態について次のように主張する。「マルクスが〈パーマネンツ宣言〉とか〈パーマネンツにおける革命〉という場合の〈パーマネンツ〉というのは、たんに「永続」などという意味ではないのである。革命史において〈パーマネンツ〉というのは革命遂行のための一つの機関なのである。」と主張する。ついで、

1848年の時点でこのパーマネンツが実際に宣言され、発動されたのはウィーンであるから、パーマネンツという言葉の内容を知るためには、1848年のウィーンの歴史にさかのぼってみなければならない、と述べて、48年のウィーン革命の実態を検討する。その検討に基づいて氏は、「パーマネンツの宣言は、この時期の資料に使われているドイツ語では、マルクスの使い方と同様、„sich Permanenz erklären“か „sich permanent erklären“である。パーマネンツ宣言とは、一般的な意味としては、会議を中断することなく続けるということである……。しかし〈パーマネンツ〉というのは、たんに会議を中断しないということだけでなく、それ自体一つの執行機関の成立を意味するとともに、さらにまた執行機関そのものをも意味した」、という。

これが、ほぼ良知氏の主張する、ウィーン革命の実態に即した、「パーマネンツ」の意味内容である。

良知氏は、このように、ウィーン革命の実態に即して、「パーマネンツ」の意味内容を明らかにした上で、1848年3月から秋にかけてのプロイセンの革命の経過に対する総括として、『新ライン新聞』1848年12月10日付のマルクスの論文「ブルジョアジーと反革命」から、次の引用をする。「ドイツでは純粹のブルジョア革命は、また立憲君主制の形式のもとでのブルジョア支配の樹立は不可能であり、封建的・絶体主義的反革命か、あるいは社会的＝共和主義的革命だけが可能である。」(MEW, Bd. 6, S. 124) このマルクスの主張をうけて、氏は〔ドイツにとって〕「可能な道は、王権を全面否認し、旧来からの法的基盤をいっさい放棄し、革命そのもののなかに革命の権原を求め、そのかぎりでブルジョアジーのディクタトゥアを確立し、当時の言葉でいうところの社会＝民主主義的共和制を追求する以外にない。そしてこのようなディクタトゥアを確立するための手続が〈パーマネンツ〉であった。ところでこうした〈社会＝民主主義的・赤色共和制〉としてのブルジョアのディクタトゥアは、プロレタリアートの政治的支配へ、すなわちプロレタリアートのディクタトゥアに移っていかなければならないのだが、しかし、この二つのデ

イクタトゥアのあいだに万里の長城のような境界線があるわけではない。赤色共和制はなおブルジョアジーの支配のなかにありながら、同時にすでにブルジョア的ではない。したがってそれは、まだプロレタリアートのディクタトゥアに移行していないけれども、すでにプロレタリアートの存在に属しているのである。」という。こう述べた上で氏は、「だから〈パーマネンツ〉を〈永続〉と訳して、その〈永続〉の意味をブルジョア革命からプロレタリア革命への途と解するのも、それはそれで結構だが、〈パーマネンツ〉という言葉の本来の意味には直接の関係はないのである。」(112ページ)、と断定する。この断定にひきつづいて、次の主張をもって、この「虚像について」という論文を結んでいる。

「〈永続革命〉という正体不明の言葉は、歴史についての無知と誤解が生み出した産物である。しかし、どんな言葉も、一度新しい衣装を着せられて生まれ変われば、あとはそれなりの活動の場を見いだしていく。虚像が実像にとって代わる。実像は歴史の地平の下に沈むのである。」

以上、良知氏の「永続革命」批判の主張を忠実に詳しく辿ってみた。以下、良知説を検討しよう

## ② 良知説の検討

良知説の検討に入る前に、まず触れておきたいのは、次の点である。氏は、上の引用文の最後で、「どんな言葉も一度新しい衣装を着せられて生まれ変われば、あとはそれなりの活動の場を見いだしていく。虚像が実像にとって代わる。実像は歴史の地平線下に沈むのである。」と述べている。この主張は歴史の実像と虚像の複雑な関係についての行き届いた見解であり、なかなか気のきいた、しゃれた表現である。しかしあえて言えば、その点は、思想史研究の「いろは」であり、ことさら物々しく、声高に主張するほどのことではない。

それはそれとして、私がここで問題にしたいのは、「永続革命」という言葉



が、氏のいうごとく「正体不明な言葉」であり、「歴史についての無知と誤解の生み出した産物である」のかどうか、という点である。良知氏は、「〈永続革命〉という正体不明な言葉は歴史についての無知と誤解の生み出した産物である。」というセンテンスの前のセンテンスで、次のごとく主張していることは、すでに引用したところである。「だから〈パーマネンツ〉を〈永続〉と訳して、その〈永続〉の意味をブルジョア革命からプロレタリア革命への途と解するのも、それはそれとして結構だが、〈パーマネンツ〉という言葉の本来の意味には直接の関係はないのである。」この一文は、前半と後半で主張が割れていて、すっきりしない文章である。前半の「だから〈パーマネンツ〉を〈永続〉と訳して、その〈永続〉の意味をブルジョア革命からプロレタリア革命への途と解するのも、それはそれで結構だが」、という主張は、すでに引用した、この一文に至るまでの氏自身の叙述から当然にひきだされる見解である。しかし、この主張の曖昧さ、また複雑さは、「それはそれで結構だが……」という微妙な表現をとって、氏自身の積極的判断をさけてとおって、読者の判断にゆだねる形をとっている点にある。このように「それはそれで結構だが」という曖昧な主張を述べた後で、一転して〔それは〕「〈パーマネンツ〉という言葉の本来の意味に直接の関係はないのである」と断定して、この断定にこの文章の全力点がかけられている。こうして、この文章の構成は、後半の主張が前半の見解を打消し、否定する形になっているし、良知氏の真意はおそらくそうなのであろう。しかしいづれにしても、この一文の内容はすっきりしないものである。では、前半と後半の関係をいかに考えるべきであろうか。その点をここであらためて問題にしよう。

たしかに良知氏が強調するごとく、1848年のウィーン革命の実態に即してみると、「パーマネンツ」の言葉の本来の意味は、氏の主張のごとく、革命遂行のための「一つの機関」を意味する「パーマネンツ」であった。またそれは、「パーマネンツ室」Permanenzsaalと呼ばれたパーマネンツ治安委員会と結びつく〈パーマネンツ〉であり、その場合は、いわゆる「永続革命」

につながる内容をもつパーマネンツではなかったであろう。その点を革命史の実態に即して明確にした点は、こんどの良知説の功積である。しかしそれは、あくまでもウィーン革命の実態に即したパーマネンツという用語の解釈としてのことであり、マルクスもまた『階級闘争』と「呼びかけ」においてそれと同じ意味内容のものとしてパーマネンツという表現を用いたかどうかは、また別個の問題である。したがって、マルクスが1850年に『階級闘争』と「呼びかけ」で主張している、「革命のパーマネンツ宣言」Permanenzerklärung der Revolution、「革命をパーマネンツ化する」die Revolution permanent zu machen、「革命をパーマネンツに」Revolution in Permanenzという用語が、1848年のウィーン革命で用いられた革命遂行のための「一つの機関」を意味するパーマネンツと同じ意味内容をもっていたのか、という点が、あらためて問題にされねばならない。またそれとの関連において、マルクスのこれらの用語が、後世のたとえばトロツキーやE・H・カーやバーリンやまたはリヒトハイムが用いた永続革命 permanent revolution（これは、良知氏も指摘するごとく、マルクス自身の言葉ではない）と、内容的にみて、異質のものであったのか、という点も検討されねばならない。マルクスの用語は、良知氏の指摘するごとく、当時の資料で用いられていた „sich in Permanenz erklären“, „sich permanent erklären“ と同様であり、またマルクスがパーマネンツという言葉を用いたとき、48年革命史において実際に使用されたパーマネンツの用語を十分に意識し、その点をふまえて用いたことに間違いないと考えられる。しかしそのことは、ただちにマルクスが、これらの言葉をウィーン革命での用例のごとく革命遂行のための「一つの機関」またはパーマネンツ治安委員会と結びつく、「パーマネンツ室」の意味で用いたことを意味しない。そうではなく、ブルジョア革命からプロレタリア革命に継続される「永続革命」的な意味で用いたものと私は考えている。その点は、良知氏も全面的には否定していない。

すでに引用したごとく、氏が、1848年のマルクスの論文「ブルジョアジー

と反革命」に言及したうえで、〔ドイツにとって〕「可能な途は、王権を全面否認し、旧来からの法的基盤をいっさい放棄し、革命そのもののなかに革命の権原を求め、そのかぎりでブルジョアジーのディクタトゥアを確立し、当時の言葉でいうところの社会＝民主主義的共和制を追求する以外にない。そしてこのようなディクタトゥアを確立するための手続きが〈パーマネンツ〉である。ところでこうした〈社会＝民主主義的・赤色共和制〉としてのブルジョアジーのディクタトゥアは、プロレタリアートの政治的支配へ、すなわちプロレタリアートのディクタトゥアへ移っていかねばならないのだが、しかし、この二つのディクタトゥアのあいだには万里の長城のような境界線があるわけではない。赤色共和制は、なおブルジョアジーの支配のなかにありながら、同時にブルジョア的ではない。したがってそれは、まだプロレタリアートのディクタトゥアに移行していないけれども、すでにプロレタリアートの存在に属しているのである。」と述べて、それにひきつづいて「だから〈パーマネンツ〉を〈永続〉と訳して、その〈永続〉の意味をブルジョア革命からプロレタリア革命への途と解するのにも、それはそれで結構だが……」という氏自身の主張が、裏からそのことを認めているところである。

なお、その点は、本稿ですでに言及した、氏が引用しているマルクスの主張からもいえるところである。すなわち、マルクスは、『階級闘争』において、「革命のパーマネンツ宣言」を主張している箇所でも、良知氏自身も認めているごとく、マルクスはここでフランスを世界史的革命の範例としてとりあげ、そこでの権力奪取の過程をいくつかの過渡的段階にわけてあきらかにしようとしている。また50年3月の「呼びかけ」では、マルクスがこの時点で、民主主義的小ブルジョアジーとの共闘を排して、したがってまた社会＝民主主義的要求をのりこえて、プロレタリアートのディクタトゥアへ向う方向をあきらかにしていると主張しているのは、他ならぬ良知氏自身である。それに引きつづいて氏は、同じく「呼びかけ」から「われわれの利益とわれわれの任務は、多かれ少なかれ有産的なすべての階級が政権から追い出され、国家

権力がプロレタリアートに掌握され、一国だけでなく全世界のすべての主要な諸国においてプロレタリアの連合が前進して、これら諸国でのプロレタリア同士の間競争がやみ、少くとも決定的な生産諸力がプロレタリアの手に集中されるまで、革命をパーマネント化することである」という主張を引用し、さらにこの「呼びかけ」はプロレタリアの「闘の声はこうでなければならない。革命をパーマネンツに」というスローガンで結ばれていることを良知氏自身が述べていることは、すでに指摘したごとくである。

このように『階級闘争』と「呼びかけ」で主張されている、マルクスの *Permanenzerklärung der Revolution, die Revolution permanent zu machen*, また *Die Revolution in Permanenz* の意味内容は、良知氏のいう革命遂行のための「一つの機関」または「パーマネンツ室」の意味で用いられているのではなく、まさに革命を永続化させる意味で用いられているのである。

なお、マルクスの主張が、永続革命的な内容のものであることを、より端的に示しているのは、同じく1850年4月の「革命的共産主義者万国協会」の規約第一条である。

「第一条 本協会の目的は人類家族の最終形態たるべき共産主義が実現されるべき革命を永続的につづけながら *die Revolution in Permanenz erhalten* すべての特権階級を打倒し、これらの階級をプロレタリアの独裁（ディクタトゥア）に従属させることである。」(MEW, Bd. 7, S. 533)

こうしてみると、良知氏の強調するように、「永続革命」という「正体不明な言葉は歴史についての無知と誤解の生みだした産物である」とはいえない。むしろこの良知説は、マルクスの用いたパーマネンツという言葉にたいする、氏自身の「誤解」を示す以外の何物でもない。こうしていわゆる「永続革命」という概念は、けっして「歴史についての無知と誤解の生みだした産物」ではなく、したがって歴史における「虚像」とはいえない。

## 2 「補論」 マルクスとブランキズムの関係

以上、「永続革命」にたいする良知氏による批判を検討したが、以下、「補論」として、マルクスとブランキ主義との関係についての淡路説に対する良知氏の批判を問題にしよう。

すでに述べたごとく、氏によれば、淡路説では、永続革命論の内容は、「経済の発展段階を飛び越す」「いわゆる飛び越し論」であり、それはブランキ主義的な「少数者革命」という性格をもつとされている。しかし「とくに三月前期までふくめたマルクスの考え方を〈ブランキ主義的な少数者革命〉とするような考え方には、基本的な疑問を呈せざるをえない」、「義人同盟（たとえばヴァイトリング）や共産主義者同盟（たとえばシャッパー＝ヴィリッヒ・フラクション）の歴史とそれへのマルクスのかかわりを具体的に考えていけば、話はむしろ逆になるのではないかというのが、私の卒直な感想である」と主張している。私は、『西欧革命とマルクス、エンゲルス』において、氏が要約されているごとく、1844年の「ヘーゲル法哲学批判序説」から1848年の『共産党宣言』を経て1850年3月の「呼びかけ」にいたるマルクスの革命論には永続革命論的な考え方が共通していることを主張した。ただし、永続革命論が明確に主張されているのは、50年3月の「呼びかけ」においてであって、44年の「序説」と48年の『宣言』では、永続革命論そのものが述べられているわけではない。そうではなく、「序説」→『宣言』→「呼びかけ」の流れを、「呼びかけ」の主張から逆算すれば、永続革命論につながり、永続革命論に発展していく考え方が一貫して存在していたということである

このうち44年の「序説」では、周知のごとく「ドイツにとっては根本的な革命、すなわち普遍的な人間解放が空想的なのではなく、むしろ部分的な単に政治的な革命、家の大黒柱に手をつけない革命が夢なのである」と述べられている。すなわち、ここではフランスの場合のごとくブルジョア革命からプロレタリア革命へと段階を追って、二段階にブルジョア革命からプロレタ

リア革命と進むのではなく、ドイツでは直接プロレタリア革命が志向され、一段階の革命が想定されている。その点は、良知氏が「政治革命でなく社会革命を、ブルジョア革命でなくプロレタリア革命を志向する」と『マルクスと批判者群像』で、明確に述べているごとくである。(良知『群像』126ページ)ただし、この「序説」ではブルジョア革命と全く無関係に、それとは別個にプロレタリア革命が主張されているとは考えられない。そうではなく、上の引用文に含意されていることは、ブルジョア革命の課題もプロレタリア革命によって解決されると想定していた、と考えられる。こうして、ブルジョア革命の課題がプロレタリア革命に包攝されているという意味において両者は一定の結合関係において捉えられていたと考えられる。ただし、この「序説」の主張そのものは、けっして永続革命論的なものではないし、それに直接つながるものでもない。この点をも、ここでは明記しておきたい。

ところが、次の48年の『宣言』では、有名な「ドイツのブルジョア革命はプロレタリア革命の直接の序曲でありうる」と述べられていて、両者の連続性または継続性を明確に予測している。この主張は、明らかに50年3月の「呼びかけ」の永続革命論的主張に直接つながるものである。

こうして、44年の「序説」→48年の『宣言』→50年の「呼びかけ」をつなぐと、思想的流れとしては50年の永続革命論的なものに展開されていく考え方を辿ることができる、というのが私の見解である。しかし、この流れをより厳密に検討すると、後半の『宣言』→「呼びかけ」の展開では連続革命→永続革命の流れを明確に辿れるのにたいして、前半の「序説」→『宣言』では、永続革命論的な考え方への展開が明確な形で述べられているわけではない。私は、『マルクスの後進国革命像』と『西欧革命とマルクス、エンゲルス』において、「序説」→『宣言』→「呼びかけ」の流れは、「呼びかけ」での永続革命論につながる思想の展開が述べられていると主張しておいたが、その際、前期の「序説」→『宣言』の時期については、マルクスの思想の展開を綿密に跡付けたわけではない。したがって、この前期については、再検討を要す

るものと考えている。

ただし、前期とは異なって、後期の『宣言』→「呼びかけ」の時期は永続革命論的見解が明確に展開されている。なおまた、50年3月の「呼びかけ」から50年夏までのマルクスの革命論は、ブランキ主義的な少数者革命論と共通のものであった。その点は、『革命像』の「第2章 1850年のマルクス」で比較的詳しく述べておいたところである。しかし、マルクスとブランキ主義者との密接な関係は、夏までの短い期間に限定されており、それ以降になると、両者の関係は切れていった。すなわち、夏以降になると政治経済情勢の安定化にともなって、共産主義者同盟の内部で情勢判断について鋭い対立が生じ、9月15日の中央委員会の席上でマルクス派とヴィリッヒ派が分裂するに至った。マルクスはそれ以前に堅持していた革命の早期再燃の予測を放棄して、彼の追従者たちに向って時期尚早で非科学的な陰謀術策の方針をとらぬように説得するようになった。それに対して、ヴィリッヒ＝シャッパー派は、革命の推進力になるのは、現実の諸関係ではなく、「たんなる意志」*blosse Wille* であるとして、ただちに「政権を握らなければならない」と主張した。言葉をかえていえばマルクスはこの時点では、ブランキ主義的暴力説から訣別したのである。この経緯からして、「共産主義者同盟（たとえばシャッパー＝ヴィリッヒ・フラクション）の歴史とそれへのマルクスのかかわりを具体的に考えていけば、話はむしろ逆になるのではないかというのが、私の卒直な感想である」という良知氏の主張のとおりである。そうした点では良知氏と私との間で意見の相違はない。そして50年秋の『新ライン新聞・政治経済評論』第5・6号併合では、明確に革命の早期再燃の予測を放棄して、「新しい革命は新しい恐慌にひきつづいてのみ起こりうる」という新見解、つまりブランキ主義的見解から完全に離脱した立場を表明した。この点も『革命像』で強調したごとくである。

しかし、問題は、それ以前の1850年3月から夏までの時期についてである。私は、その時期のマルクスの革命論は、ブランキ主義的なものであった、と

考えている。その点も、すでに『革命像』で詳しく述べておいたところである。ここでは、この時期のマルクスとブランキ主義者との密接な関係について述べておきたい。その典拠として1850年3月の共産主義者同盟の中央委員会から同盟員あての、例の「呼びかけ」と同じく3月の『階級闘争』第3編の主張と、4月の革命的共産主義者万国協会の規約、6月の共産主義者同盟の中央委員会から同盟員あての「呼びかけ」をあげたい。

まず3月の「呼びかけ」では、この時点の後進国ドイツではプロレタリア革命を直接の課題としうるほどに資本家関係は成熟していないが、秘密結社である同盟の少数の指導者によって、意識的強力的に階級対立を激化させ、革命を永続化させて、プロレタリア革命にまで至るとする、ブランキ主義的少数者革命論が主張されている。またブランキの名そのものをあげているのは、すでに何回も言及した、『階級闘争』第3編の次の箇所である。「プロレタリアートは、ますます革命的社会主義のまわりに、すなわちブルジョア自身にそれについてたいしてブランキなる名称を考えだした共産主義の周囲に結集しつつある。」と述べている。このように、マルクスの主張する共産主義がブランキ主義と等置されており、このブランキなる名称をもつ社会主義は、「革命の永続性」、「階級差別の廃止」さらにそれに到る通過点として「プロレタリアの階級的デイクタトゥア」がその核心とされていた点は、すでに述べたごとくである。

次に50年4月には、ロンドンで革命的共産主義者万国協会が結成され、この協会には共産主義者同盟からマルクスとエンゲルスを含む3人の代表者と、ロンドン亡命中のブランキ主義者の組織からアダン、J・ヴィディルの2人の代表者と、さらに革命的チャーティストからG・ジュリアン・ハーニーの、計6名によってその規約が調印された。(MEW, Bd, 7, S. 562—63, ムーア『三つの戦術』, 28—29ページ, 『革命像』70ページ) この協会は構成メンバーばかりでなく、その存在さえ下部協会員に秘密にされていた、少数の革命家集団であった。



なおまた、6月に配布された、共産主義者同盟の中央委員会から同盟員への「呼びかけ」では、「フランスの革命家のうちでは、ことにブランキを首領とする本来のプロレタリア党が、われわれと手を結んでいる。ブランキ派の秘密結社の代表は同盟の代表と規則的に正式に連絡をとっており、同盟の代表に当面するフランス革命のための重要な準備的な仕事を委託した。/革命的チャーティスト党の指導者たちも、同様に、中央委員会の代表と規則的に密接な連絡をとっている。」(MEW, Bd. 7, S. 319)と述べられている。

以上、例挙げた3月、4月、6月の主張からして、これらの時点では、マルクスはブランキ主義的な少数者革命論に同調する立場に立っていたことは否定しえないであろう。なお、この時点における主張は、革命を永続化させ、ブルジョア革命からプロレタリア革命に至ることが想定されている。その意味では内容的に「飛び越し」論であったことも否定しえないであろう。ただし、そうした主張が疑問の余地なく明確に述べられているのは、50年3月から50年夏までの、約半年間の短い期間のことであった。夏以降になってもなお依然として、経済情勢とは無関係にただ暴力に訴えて政権奪取の行動をすることを主張するヴィリッヒ、シャッパー派と対立して、マルクスは「新しい革命は新しい恐慌にひきつづいてのみおこりうる」という新見解を打ち出すようになるのである。